

本調査の結果をもとに、ゲイ・バイセクシュアル男性が対人援助職の方々に求めていると思われる事項の中で、特に共通すると考えられる点を下記のようにまとめました。



対人援助職（保健・医療・福祉・教育領域）の方々へ

ゲイ・バイセクシュアル男性は、ステレオタイプな見方で一括りに対応されるのではなく、ひとりひとりをニュートラルにありのままに理解されることを望んでいます。彼らは、対人援助のさまざまな仕事に就いている方々に対して、性の多様性を理解した上で、個々に異なる人間を援助しようとする姿勢を求めています。性的指向を明らかにしても拒絶せず、また性の多様性への理解を促進する医療・保健・福祉・教育領域の専門職が、必要とされていると言えるでしょう。



メンタルヘルスの専門家（精神科医・臨床心理士・カウンセラーなど）の方々へ

メンタルヘルスに関して援助や治療を必要としているゲイ・バイセクシュアル男性の中には、性的指向を明らかにした際にどう反応されるか、秘密保持を信頼できるか、などの不安から専門家にアクセスできずにいる人が少なくありません。精神科医・臨床心理士・カウンセラーには、アクセスすること自体を、またアクセスしたあとも性的指向について自己開示することをためらう彼ら特有の恐れを理解し、クライアントがゲイ・バイセクシュアル男性とはわからなくても性的指向について中立的な姿勢を保つなど、信頼関係を構築できるような支援環境を提供することが求められています。

また、ゲイ・バイセクシュアル男性との臨床実践を通して得られた知見を、同じメンタルヘルスの専門家に対して提供することや、大学や専門学校において保健・医療・福祉・教育領域の専門職養成に携わる際に、性の多様性に関する教育を行うなどの努力は彼らへの支援の輪を広げる上で重要であると考えられます。



予防行動への介入を考えている方々へ

ゲイ・バイセクシュアル男性の性的指向・予防行動に関する考えや行動のレベルには、相当個人差があります。また、メンタルヘルスの観点からHIV予防行動について検討する必要性が当事者から示唆されています。従って、性的指向に対する肯定度や予防行動、そしてメンタルヘルスの状況にも十分配慮し、個別性に基づいた多層的な予防介入が求められていると言えるでしょう。予防行動の心理・社会的要因についてゲイ・バイセクシュアル男性自身の洞察を促すような試みも、重要な働きかけの1つでしょう。

ゲイコミュニティに所属する当事者だからこそできる介入もあれば、逆に何らかの専門性を有した非当事者であるからこそ可能な介入もあると考えられます。非当事者による介入において対象となるゲイ・バイセクシュアル男性たちとの間で信頼関係を築くには、まず彼らのライフスタイルや置かれている状況の全体像を、偏りなくニュートラルに理解しようという姿勢が不可欠です。その上で、相手がゲイ・バイセクシュアル男性だからといって構えることなく、積極的に専門職としての技術や知識を彼らに提供することが求められています。その際には、当事者であるゲイ・バイセクシュアル男性自身が持っている問題意識や、「自分たちも変わりたい、変えたい」という動機づけや主体性を尊重し、活かすことも大切です。

ただし、メンタルヘルスやセックス、HIV感染という話題は、一般的にはタブー視されがちな上に、個人のごくプライベートな部分に触れることであるだけに、介入の対象者に様々な感情的反応を喚起する可能性があります。介入することが対象者に傷つきや不快を残す体験にならないよう、その時々への反応への感受性と配慮が必要だと言えるでしょう。



調査研究をする方々へ

ゲイ・バイセクシュアル男性などの「男性とセックスをする男性（MSM）」を、HIV感染の「ハイリスクグループ」と位置付けた調査研究を安易に実施することは、対象の個性性を見失ってしまう危険性と、彼らに付与された社会的スティグマを強化する危険性があります。そのため、介入の前提となる客観的な事実や、介入の意図をきちんと説明することが重要です。

また、性行動やメンタルヘルスについて調査することが、対象者側には侵襲的と感じられる危険性にも注意しないと、対象を意図せずして傷つけたり、信頼関係を築けなくしてしまうことにもつながりかねません。

調査研究結果については、できる限りゲイコミュニティや研究参加者に対してフィードバックすること、そしてその結果をもとに彼らの利益につながるような提言や介入を行っていくことが求められています。

彼らは、興味本位ではなく学術的で真摯な関心をもとに、彼らに対する理解を深めようとする調査研究には、積極的に協力する姿勢を持っています。

■ 引用について

本報告書の内容を無断で転載・転用・引用することを禁止します。

この報告書にまとめられている内容は、ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスやHIV予防対策に役立てるといふ、本研究の目的と趣旨に賛同した研究参加者の率直な回答から得られた、貴重なデータに基づいています。そのため、この趣旨以外の目的でこれらのデータが利用されることは、研究参加者にとっても、私たち研究実施者にとっても大変不本意なことです。本報告書の内容を無断で転載・転用・引用することはお控え下さい。この報告書がゲイ・バイセクシュアル男性への理解の促進と、差別や偏見の解消に少しでも寄与するとともに、今後のHIV感染予防対策のために活用されることを、研究実施者一同、心から願っています。引用等にあたっては下記発行者までお問い合わせください。

ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート

ゲイ・バイセクシュアル男性のHIV感染予防行動と心理・社会的要因に関する研究「研究報告書」概要版

本研究は平成14年度厚生労働省エイズ対策研究事業「HIV感染症の動向と予防介入に関する社会疫学的研究」（主任研究者・木原正博）および平成15年度厚生労働省エイズ対策研究事業「男性同性間のHIV感染予防対策とその推進に関する研究」（主任研究者・市川誠一）の研究として実施された。

本報告書に掲載された論文および図表には著作権が発生しております。
複写等の利用にあたっては発行者までご連絡ください。

発行日 平成17年12月20日

発行者 日高 庸晴 E-mail : yass@kta.att.ne.jp

事務局 厚生労働省エイズ対策研究事業 男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究
(主任研究者 市川 誠一)

名古屋市立大学看護学部感染予防学研究室
〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1
Tel : 052-853-8089 Fax : 052-853-8032

デザイン 株式会社マイ・ビジネスサービス

本報告書は財団法人エイズ予防財団 平成17年度厚生労働科学研究費補助金
エイズ対策研究推進事業の研究成果等普及啓発事業として作成された。

人、自分には肯定的です。将来を真摯に考えるのはストレスで
れる立場の人の気持ちも理解しやすいと思うので、ゲイに生ま
てて幸せでもないけれど、ゲイだからといって不幸せな人生だ
も同性愛者も、1人の人間としての価値は同じはずだ。世の中
な性のあり方があることを、もっと理解してもらいたい。また
同じゲイでも色々な趣味志向の人がいることを分かってほしい
くときに、周りの目を気にせずに手をつなげるような社会にな
い。同じゲイの人と出会えたことで、1人だけじゃないんだと
自分を認められるようになった。好きな人に好きだと胸を撞っ
その人とデートをし、宙に抱き上げたい。本当にそれだけでい
気持は悪いです。でもセックスもしたい。自分はHIV陽性者だが
ノセラーと話せることが変えになっている。悩みを無暗に出し
とが大抵なんだと思う。特に若い人にとって住みよい社会に
の効果を期待してあげたい。人生初期の学校教育から性の多様